

論文の内容の要旨

論文題名

結帯動作における肩甲骨，体幹，骨盤の動きの関係 ―利き手側と非利き手側での比較―

掲載雑誌名

なし

保健医療学研究科保健医療学専攻 博士前期課程
リハビリテーション領域 運動機能学部門 鈴木 加奈子

内容要旨

【背景・目的】結帯動作は肩関節内旋可動域が獲得されても遂行できないことが多い。結帯動作には肩・肩甲骨の他に体幹・骨盤の動きが関係し、指椎間距離(C7棘突起と母指先端の距離)に関係すると考えられるが、明らかではない。本研究の目的は、結帯動作での肩甲骨内旋と体幹・骨盤の動きの関係、指椎間距離と関係する動きについて利き手、非利き手別に明らかにすることである。

【方法】対象は右利きの健常男性 20 名とした。端座位での利き手、非利き手における結帯動作を三次元動作解析装置 VICON で計測し、肩・肩甲骨・上部体幹・骨盤角度、胸骨上端前後移動量、指椎間距離を算出した。肩甲骨と上部体幹・骨盤角度の関係、指椎間距離と算出角度・移動量の間を Pearson または Spearman の相関係数を算出して検討した。

【結果】利き手の肩甲骨内旋と上部体幹後傾・骨盤前傾、非利き手の肩甲骨内旋と上部体幹前傾に有意な相関があった。指椎間距離は利き手では胸骨上端前方移動、非利き手では肩関節内旋と有意な相関があった。

【考察】利き手の肩甲骨内旋には上部体幹・骨盤の動きが関係し、肩甲骨内旋を大きくするには上部体幹後傾・骨盤前傾の評価が有用な場合があると考えられる。利き手では胸骨上端前方移動、非利き手では肩関節内旋が指椎間距離に関係し、利き手、非利き手別に上肢・体幹・骨盤角度に加えて胸骨上端前方移動を評価することは結帯動作改善のために有用と考える。